

人工林資源の循環利用促進に伴う苗木の動向について
(その1)
森林整備部 森林整備課

【林業用苗木について】

人工林資源の循環利用を推進するに当たり、苗木の安定供給が大きな課題となっています。このため苗木の需給調整が重要です。林業用の苗木には、野菜の苗木をホームセンターで買うような市場の広さが無いことから、造林者が使用する苗木の数量と、苗木生産者が作れる苗木の数量を事前に調整しておかないと、植えたい時に植えたい苗木が揃わないということが起こってしまいます。

主たる林業用の苗木は、出荷するまでにカラマツで2年、スギ・ヒノキで3年程度を必要とします。例えば「平成34年の春植えにスギ苗木5万本が必要」となれば、平成31年の春、播種(はしゆ)する時期(種を蒔く時期)までに苗木生産者に伝えなければなりません。しかし、予定が変更となり苗木の実際の調達本数が減少すると残苗となってしまう、出荷できなかった苗木は廃棄され、2〜3年育苗にかけた時間と手間が無駄になってしまいます。したがって、主伐の実施に当たっては、毎年度の伐採・搬出の実施量及び時期と、確実に苗木を植えられる時期の確認を行い、苗木の需要計画の精度を上げる必要があります。



スギ人工林



カラマツ採種園 (着花を促し採種しやすい樹形への誘導が必要)

関東局管内の国有林における過去10年間の植栽本数の推移を見ると、平成21年度の200万本から減少傾向にありました

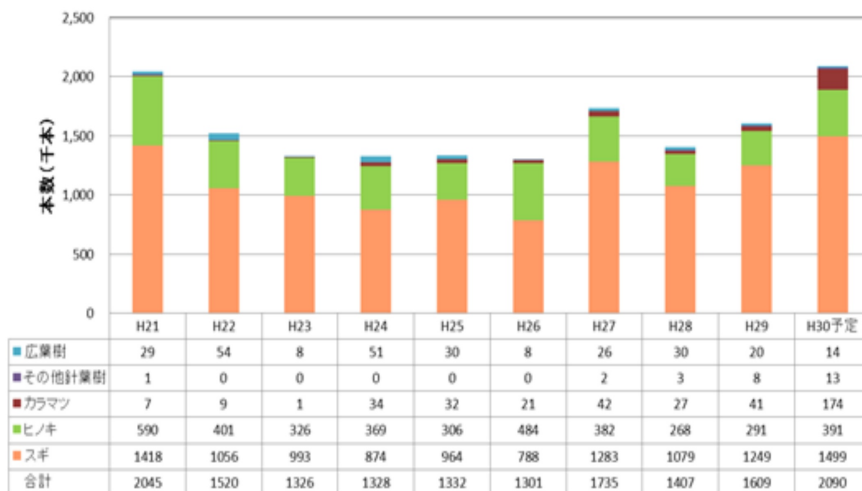
が、平成30年度当初では、再び200万本を超える計画となっています。今後、さらに多くの人工林資源が主伐期を迎えると、主伐と其の後の再造林が進み、苗木の需要についても増加傾向が続く見込みとなっています。

関東局管内の国有林で植栽する苗木の樹種については、7割程度がスギとなっています。では、何故、林業用の苗木の樹種としてスギが選ばれることが多いのでしょうか。スギは温帯性針葉樹で、温暖多雨な日本の気候に適した樹種であり、成長が良く繁殖も容易です。九州の飢肥(おび)地域では、400年も前から挿し木による植林を行ってきました。また、スギはジベレリン(発芽や花芽形成に重要な役割を持つ植物ホルモン)を散布することで雄花が着花しやすくなり、ヒノキやカラマツに比べると種子生産が容易です。さらに、スギは真っ直ぐに成長し、比重が軽い割には強度があること及び加工がしやすいことから、建築用材として優れた樹種と言えます。このため我が国の林業界では、昔からスギが主要な造林樹種として活躍してきたのです。



スギ球果

関東局内の植栽本数(千本)



次回(その2)で、花粉症対策苗・コンテナ苗の動向や取組についてご紹介いたします。